夢にむかって自分の力を発揮することができる児童の育成
～自立活動の指導を通して～

1　研究のねらい

2　研究の方法

3　第1次授業実践

4　第2次授業実践

5　児童の変容

6　研究のまとめ

第１４分科会
インクルーシブ教育

近藤　奈歩　（名古屋・大生小）

研究の概要報告

1　県内の自主的な研究活動のとりくみ状況

尾張地区・三河地区・名古屋地区合わせて 16 本のリポートが提出・報告された。その内容から、各地区・各単組において日頃から熱心に授業研究にとりくみ、自主的な研究活動が推進されている。また、障害のある児童生徒の成長や特性など個の実態を把握した上で、よりよいてだてを講じ、児童生徒が成長していく様子がよくわかる実践が発表された。今回報告された実践から、日頃の研究活動の成果が十分なものであることがわかった。

2　今次教研で論じられた主要な課題

（1）　討論の柱

「豊かに生きるための力を育む」を中心テーマとし、「学習指導のすすめ方」「人とかかわる力を育てる指導」「特別支援教育をどうすすめるか」の三本の柱立てで、報告にもとづいた議論を行った。

（2）　「学習指導のすすめ方」

各教科・自立活動の指導において、児童生徒の社会的・職業的自立を見据えた実践や、児童生徒が主体的にとりくめるような教材・教具の開発や場の設定など、さまざまな工夫が報告された。また、多くの発表者がICTを取り入れた授業を実践していることから、タブレット端末を活用することの利点や課題点について活発に議論が行われた。タブレット端末を授業で活用することで学習内容の理解が高まることや、調べる力が身につくことなどが確認された。反面、学習内容によっては、ICT機器よりも実物を使って指導することが効果的であることや、教員が意図しない児童生徒のタブレット端末の使用は避けるべきであるという意見が出された。

（3）　「人とかかわる力を育てる指導」

人とかかわる力を高めるために、交流及び共同学習において、友だちと協働的な学びを促す指導の工夫や、小中学校で連携をはかりながら交流行事や授業参観を行った実践などが報告された。討論では交流及び共同学習のあり方について意見交換をした。交流及び共同学習では、特別支援学級の児童生徒だけではなく、学校全体の児童生徒の成長を願うことも大切であることや、子どもどうしが、よりかかわりあいたいと思える工夫が必要ではないかという意見が出された。

（4）　「特別支援教育をどのようにすすめるか」

校内で困り感のある児童生徒への理解を深め、学校全体でとりくむ支援の工夫や、学級においてユニバーサルデザインの考え方を取り入れた授業実践について報告された。討論では、指導に困った児童生徒について、気軽に教職員間で相談し合える風通しのよい職場づくりが大切であることなどが確認された。

（5）　まとめ

今回の発表において多く報告された、自立活動、ICTを活用した指導、人とのかかわり、キャリア教育については特別支援教育における重要な課題である。今後も実践を通してよりよい指導・支援のあり方を追究していけるとよい。

3　第 73 次教研にむけた課題

今次教研分科会での成果を各単組・分会に持ち帰り、次の事項について報告されることを期待する。

（1） 合理的配慮に重点をおいた実践

（2） 生活や学習の場の移行や、将来の自立にむけた実践

（3） 学んだことをさまざまな場面で活用する力をめざした実践

（杉山　由佳・工藤　高裕）

報告書のできるまで

第 72 次教育研究愛知県集会は、10 月 15 日に対面で開催された。特別支援教育部会を推進するにあたっては、前回までの教研における成果と課題をふまえて、「豊かに生きるための力を育む」を中心テーマとした。討論では、「学習指導をどうすすめるか」、「人とかかわる力を育てるための指導」、「特別支援教育をどうすすめるか」という三つの柱に分けて行い、実践について交流を深めた。

この報告書は、県集会での討論内容及び、助言者の指導を経て作成したものである。

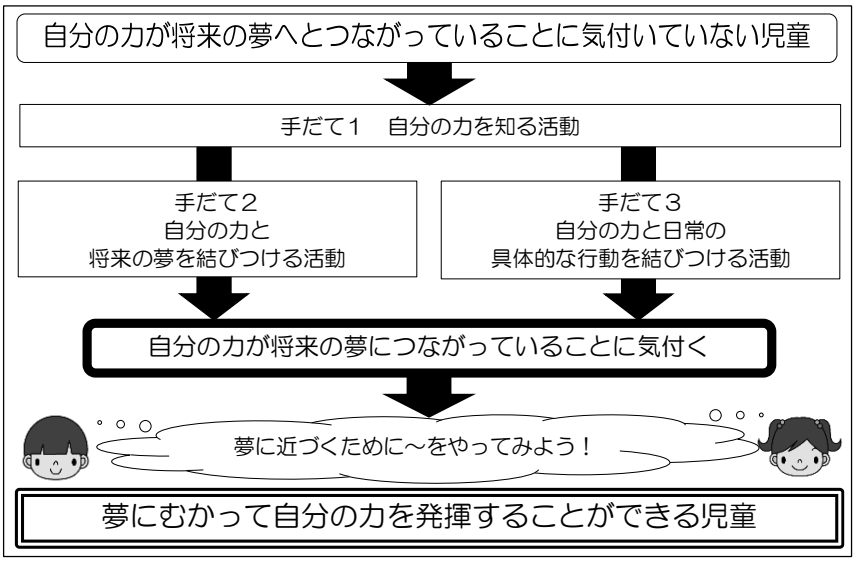
助　言　者	杉山　由佳（愛知県医療療育総合センター中央病院）	
	工藤　高裕（名古屋・天白養護）	
教育課程研究委員	田口　孝典（海部・白鳥小）	田中　洋樹（名古屋・天白養護）
	吉原　智美（碧海・知立南中）	森　はるか（名古屋・有松小）
	岩田　憲人（愛知・(長久手)西小）	湯浅　直子（尾北・岩倉南小）
	朝倉　貴行（田原・童浦小）	浦野　柚季（蒲郡・形原小）

1　研究のねらい

わたくしは、夢にむかって自分の力を発揮することができる児童を育てたい。「夢にむかって自分の力を発揮する」とは、自分の力が将来の夢へとつながっていることに気付き、将来の夢に希望をもって現在の自分の力を発揮することである。特別支援学校学習指導要領解説自立活動編では、「個々の児童又は生徒が、自立活動における学習の意味を将来の自立や社会参加に必要な資質・能力との関係において理解し、とりくめるような指導内容を取り上げること」とされていることからも、自分の力が将来の夢へとつながっていることに気付かせることは必要であるといえる。

本知的障害特別支援学級に在籍する２人の児童は学習に前向きにとりくみ、学習したことを実際の行動にいかすことができる。また、将来は警察官、パティシエになりたいとそれぞれ夢をもっており、なりたい理由も明確にある。しかし、自分がどのような力をもっているのかを十分に知ることができておらず、自分の力がどのような行動につながっているのか、また、どのように将来の夢につながっているのかをとらえることが難しい。そのため、将来の夢が漠然とした「憧れ」になっており、将来自分が夢をかなえて働くイメージをもったり、夢に近づくために何が必要であるのかについて考えたりすることが難しい実態がある。このように、自分の力が将来の夢へとつながっていることに気付くことができていないといえる。

そこで、本研究では、自立活動の学習において、自立活動の６区分で表されている力を「自分の力」とし、具体的な内容を児童と共有することで、自分がどのような力をもっているかを知る活動を行う。その上で、自分の力を将来の夢や日常の具体的な行動に結びつけて考えさせる活動を行う。これらの活動を通して、自分の力が将来の夢へとつながっていることに気付き、夢にむかって自分の力を発揮することができる児童を育成することができると考え、右図のような構想で研究にとりくんだ。



【図１】　構想図

2　研究の方法

(1)　**対象**　　知的障害特別支援学級に在籍する２人

(2)　**児童の実態**

児童	実態
A	○　自分の力を十分に知ることができていない。自分の好きなこと、嫌いなこと、得意なこと、苦手なことは認識している。 ○　自分の行動がどのような力をもとに成り立っているのかを理解していない。そのため、他者から称賛される行動を繰り返すことが多く、自分自身への気付きにつながっていない。また、自分が思うように行動できなかったときにどのように改善す

	ればよいかという観点をもつことが難しい。 ○　戦隊ヒーローが好きなことから、将来は「警察官になって、強くて格好よい、困っている人を助けるヒーローになりたい」という夢をもっている。しかし、「憧れ」であり、自分が将来警察官として働くというイメージをもったり、そのためにどのような力が必要であるかを考えたりすることは難しい。
B	○　自分の力を十分に知ることができていない。自分の好きなこと、嫌いなこと、得意なこと、苦手なことは認識している。 ○　自分の行動がどのような力をもとに成り立っているのかを理解していない。そのため、自分の行動が他者から称賛されるかどうか、他者の様子を見て確認することが多く、自分自身への気付きにつながっていない。また、自分が思うように行動できなかったときにどのように改善すればよいかという観点をもつことが難しい。 ○　昨年度、図画工作科の時間に粘土でケーキをつくり、称賛されたことがきっかけで、将来は「パティシエになって、お客さんがうれしい気持ちになるケーキをつくって、お客さんに喜んでほしい」という夢をもっている。しかし、「絶対パティシエになる」という思いをもってはいるものの、具体的に働くイメージをもったり、そのために何が必要であるかを考えたりすることは難しい。

(3)　めざす児童像に迫るためのてだて

①　てだて１　「自分の力を知る活動」

自立活動の６区分 27 項目を具体的にして示し、児童と共有することで、自分の力を理解することができるようにする。６区分は、右のように示す。

健康の保持 ↓ 健康	心理的な安定 ↓ 心	人間関係の形成 ↓ かかわり
環境の把握 ↓ 環境	身体の動き ↓ 体	コミュニケーション ↓ やり取り

②　てだて２　「自分の力と将来の夢を結びつける活動」

「総合的な学習の時間」の「お仕事調査隊」という学習で児童が将来なりたい職業に就いている人にインタビューしてわかった「仕事をするときに大切にしていること」をもとに、将来の夢をかなえるために必要な力を自立活動の６区分に当てはめて考えさせることで、自分の力と将来の夢を結びつけることができるようにする。

③　てだて３　「自分の力を日常の具体的な行動と結びつける活動」

日常の具体的な行動と自分の力がどのように関連しているかについて、第１次授業実践では、学校生活の中で児童が力を発揮している場面をエピソードとして提示することをきっかけにして自分の行動を振り返り、そのとき使った力を考えさせる。第２次授業実践では、第１次授業実践で振り返った自分の行動をもとにして夢に近づくための方法を具体化し、どのような力を意識して実行することができたかについて振り返らせる。この活動を通して、自分の力がどのような行動につながっているのかを理解することができるようにする。

３　第１次授業実践

(1) 実践のねらい

自分の力と将来の夢、自分の行動を結びつけて考えることができるようにする。

(2) 実践の様子

①　てだて１　「自分の力を知る活動」

自分の力を理解することができるように、自立活動の６区分 27 項目について具体的な内容を共有した（次頁資料１）。

Ａはワークシートに載っているイラストを見て、動きを模倣しながら「これは『よし』

ってやっているから、元気かな」「歩いているから運動かな」などと発言した。その後、教員が「言葉遣い」「食べる」などの具体的な内容を黒板に示すと「『言葉遣い』は話すから『やり取り』だと思う」「『食べる』と元気になるから『健康』だ」と６区分を理解して、教員が示した具体的な内容を当てはめることができた。教員が示した具体例の他にも「お風呂に入らないと汚くなってしまうから『健康』（に当てはまる）かな」と自分で当てはまるものを考えてワークシートに記入する姿がみられた。

【資料１】　Ａがまとめたワークシート（一部抜粋）

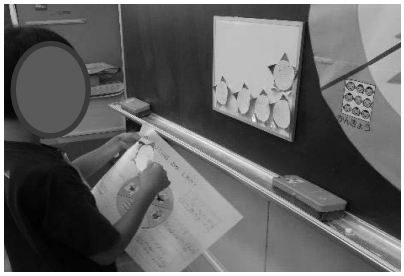
ＢはＡのイラストに着目してどのような力か考えている発言を聞き、「そうか」と納得していた。そしてイラストと区分を結びつけ、「『かかわり』は誰かと一緒だから２人いるのだね」と発言した。具体的な内容を示した際には、どのような区分に当てはまるか自分から発言することは少なかったが、Ａの発言を聞いて「賛成」とハンドサインで示す姿が多くみられ、Ａの発言を聞き、理解を深める様子がみられた。ワークシートに多くの内容が書かれていく様子を見て、「２人ともたくさんの力をもっている、すごい」とうれしそうにしていた。

②　てだて２　「自分の力と将来の夢を結びつける活動」

インタビューで仕事をする上で必要な力としてあがった以下の内容をそれぞれカードに書き、自立活動のどの区分に当てはまるかを考え、該当する区分にカードを貼らせた。

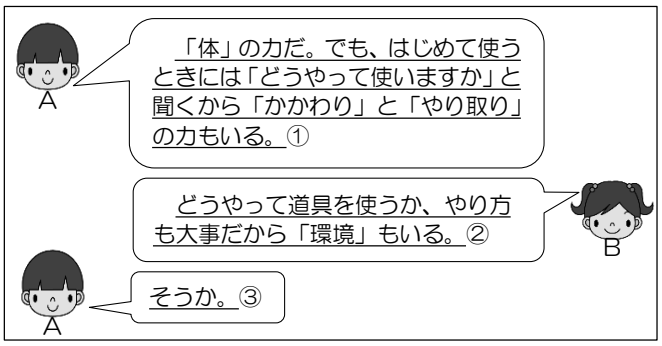
警察官（Ａが将来なりたい職業）	パティシエ（Ｂが将来なりたい職業）
規則正しい生活をする 相手の話をしっかり聞く 相手の気持ちを考える 気持ちよくあいさつをする 道具を正しく扱う、順番に気をつける ルールを守る、協力する 言葉遣いに気をつけて話す	相手の話を聞く、相手に合わせる 正しく道具を使う 相手の気持ちを考える、早寝早起きをする うまくいかなくてもコツコツ続ける 自分からあいさつ(「いらっしゃいませ」「ありがとうございました」）をする 決められた時間で動く、長い間集中する

Ａは、てだて１で使用したワークシートを見ながら、自立活動の６区分に当てはめてカードを貼っていた（資料２）。「協力する」について考える際、「『～やろう』と話すから『やり取り』だ」と「やり取り」にカードを貼ろうとしたものの、躊躇する様子がみられた。教員が理由を聞くと、「体を動かすから『体』も使う」と発言した。その場合はカードを２枚にすればよいことを伝えると「カードを追加します」とカードを増やし、貼った。複数の区分に該当するものがあることに気付いたＡは、「道具を正しく使う」について考える際（次頁資料３）、「『体』の力だ。でも、はじめて使うときには『どうやって使いますか』と聞くから『かかわり』と『やり取り』の力もいる」（下線部①）と２つの区分に該当す



【資料２】　カードを貼るＡの様子

ると発言した。それを聞いていたBが「どうやって道具を使うか、やり方も大事だから『環境』もいる」（下線部②）と発言すると、Aは「そうか」（下線部③）と納得し、「環境」の区分にもカードを追加して貼っていた。



【資料３】　自分の力と将来の夢を結び付けて考えるAの様子

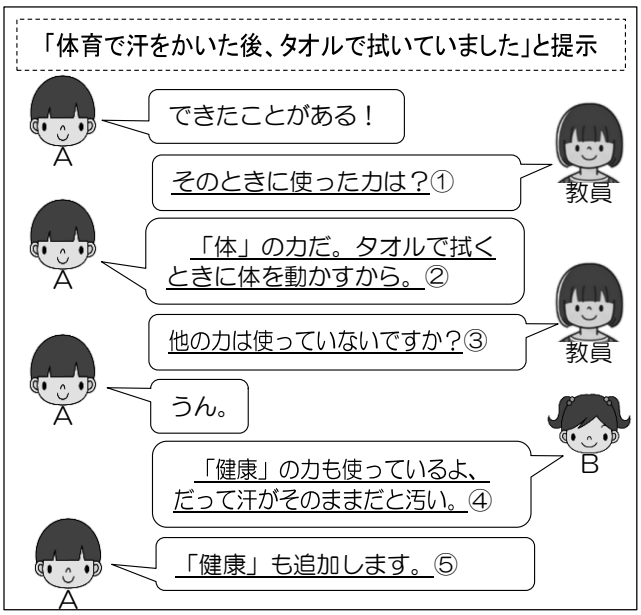
Bは、てだて１で学んだことをいかし、６区分に当てはめてカードを貼ることができた。「相手の話を聞く」について考える際、「お客さんと話すから『かかわり』と『やり取り』」と発言した。すると、Aが「大事なことをどうやって聞くか考えるから『環境』も使うんじゃない」と話すと、「たしかに」と納得し、「環境」の区分にもカードを貼った。しかし、Aが複数の力がかかわっていることに気付いた後、Bはカードをできるだけ多く貼ろうとする意識が強くなり、「うまくいかなくてもコツコツ続ける」について考える際、「元気じゃないとがんばれないから『健康』、がんばろうとする気持ちが大切だから『心』、友だちに応援してもらわないといけないから『かかわり』と『やり取り』、がんばり方が大事だから『環境』、『よしっ』って気合を入れるから『体』」とすべての区分をあげていた。「全部の力を使う」と喜んでいたが、Aから「あまり使わない力があるかもしれないね」と言われる場面もあった。

③　てだて３　「自分の力を日常の具体的な行動と結びつける活動」

自分の力と行動を結びつけて考えることができるように、児童が力を発揮している場面を以下のようにエピソードとして提示し（一部抜粋）、そのときにどのような力を使っているかを考えた。

- 図工の時間に金づちを正しく使ってじょうずに作品をつくっていました。
- 体育で汗をかいた後、タオルで拭いていました。
- 算数の問題が難しいときに何度もチャレンジしていました。

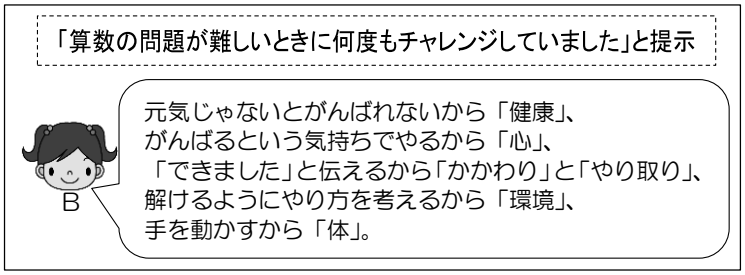
Aは「体育で汗をかいた後、タオルで拭いていました」というエピソードを提示すると、「できたことがある」と発言した。そのときに使った力は何か問うと（下線部①）、「『体』の力だ、タオルで拭くときに体を動かすから」（下線部②）と発言した。教員が、「他の力は使っていないですか」（下線部③）と問うと、「うん」と発言した。しかし、Bが「『健康』の力も使っているよ、だって汗がそのままだと汚い」（下線部④）と発言したことを受け、「『健康』も追加します」（下線部



【資料４】　自分の力と行動を結びつけるAの様子

⑤）と、「健康」にもカードを貼った（前頁資料４）。「算数の問題が難しいときに何度もチャレンジしていました」というエピソードを提示した際、「『がんばるぞ』という気持ちでやるから『心』、体を動かして字を書くから『体』、解き方を聞くから『かかわり』と『やり取り』」と発言するなど、他のエピソードも自分の力と行動を結びつけて考えることができていた。

Ｂはてだて２同様、複数の力に当てはめようとする姿が多くみられた。「算数の問題が難しいときに何度もチャレンジしていました」というエピソードを提示した際（資料５）、「元気じゃないとがんばれないから『健康』、がんばるという気持ちでやるから『心』、『できました』と伝えるから『かかわり』と『やり取り』、解けるようにやり方を考えるから『環境』、手を動かすから『体』」と行動と結びつけてすべての力をあげ、「全部の力を使っている」と喜んだ。他のエピソードを提示した際にも自分がとった行動がどのような力を使った結果であるのかを考えることよりも、多くの力と結びつけてカードの数を増やすことに意識をむけている様子だった。



【資料５】　自分の力と行動を結びつけるＢの様子

その後、帰りの会で、「今日の出来事」として自分の力を発揮した行動をカードに書き、使った力の欄に貼らせた（資料６）。ＡもＢも１日の行動を振り返り、「たくさんあるから何にしようか迷う」と話しながらカードを書いていた。それを自分の力と結びつけて考え、当てはまる区分にカードを貼っていた。

【資料６】　カードを貼る様子

それを５日間とりくみ、自分の力と行動を結びつけて以下のように（一部抜粋）多くのカードを貼ることができた。

Ａのカードの内容	・　図画工作科の時間に、金づちを正しく使った。 ・　バスケで協力した。 ・　リコーダーで高いドの音を鳴らした。 ・　給食の前に配膳台と机を拭くときにＢと協力して早くできるようにした。 ・　難しい算数の問題を解くときに「難しいけれどがんばろう」とチャレンジした。 ・　算数で繰り上がりのある足し算の筆算を解いた。
Ｂのカードの内容	・　交流であいさつした。 ・　「一緒に鬼ごっこしよう」と友だちを遊びに誘った。 ・　バスケの試合で負けた時に「次がんばろう」とすぐに気持ちを切り替えた。 ・　１年生がチャイムが鳴ったときにおもちゃの片付けが終わっていなかったから手伝った。 ・　体育の道具を準備するときに４年生の友だちと協力した。 ・　バスケで作戦を立てるときに、友だちの話を聞いたり、自分のアイディアを話したりした。

ＡもＢもカードに書かれた行動だけでなく、「今『環境』の力を使ったよ」と発言したり、教員が児童の行動を称賛する際に「今の素敵な行動は、どんな力を使ったのかな」と聞くと、「相手の気持ちを考えたから『かかわり』、言葉で話したから『やり取り』」「うまくいく方法を考えたから『環境』」などとすぐに返答があったりする場面も多くなった。また、しだいに自分だけでなく、友だちの行動にも関心を寄せ、「今『やり取り』の力を使ったね」「２人で協力したから『やり取り』と『かかわり』の力を使ったよ」といった発言も聞かれるようになった。しかし、カードが増えるにつれ、カードの枚数を増やすことに意識がむいている様子が多くみられた。また、自分の行動がどのように将来の夢とつながっているかについて意識する様子は少なかった。

(3) 成果と課題（○成果　●課題）

○　自分の力を、日常の具体的な行動と結びつけて考えることができ、日常生活で使っている力を意識する発言が増えた。

○　自分の力と、将来の夢を結びつけ、将来なりたい職業に就いている人がどのような力を使っているのかを理解することができた。

●　カードの枚数を増やすことに意識がむき、自分の行動がどのような力をもとに成り立っているのかを意識する様子が少なかった。一つの行動がどの力から成り立っているのかを意識できるようにワークシートを工夫する必要がある。

●　自分の行動を将来の夢と結びつけて考える場面が少なかったことから、将来の夢に近づくためにはどのような行動ができるようになることが必要であるかを考えさせる必要がある。

(4) 第２次授業実践に向けた改善点

カードの数を意識するのではなく、一つの行動がどのような力をもとに成り立っているのかをつかむことができるようにするため、自分がとった行動を書き、その際に使った力を線で結ぶことができるワークシートに変更する。また、自分の力と将来の夢をつなぐために、現在の自分の姿と将来なりたい職業に就いている人の姿を比較できるようにし、どのような力が必要か、その力を使って具体的にどのように行動を変化させるかを考えることができるようにする。

４　第２次授業実践

(1) 実践のねらい

自分の力を発揮した行動が将来の夢につながっていることに気付き、将来の夢に近づくための具体的な方法を考え、実行することができるようにする。

(2) 実践の様子

①　てだて１　「自分の力を知る活動」

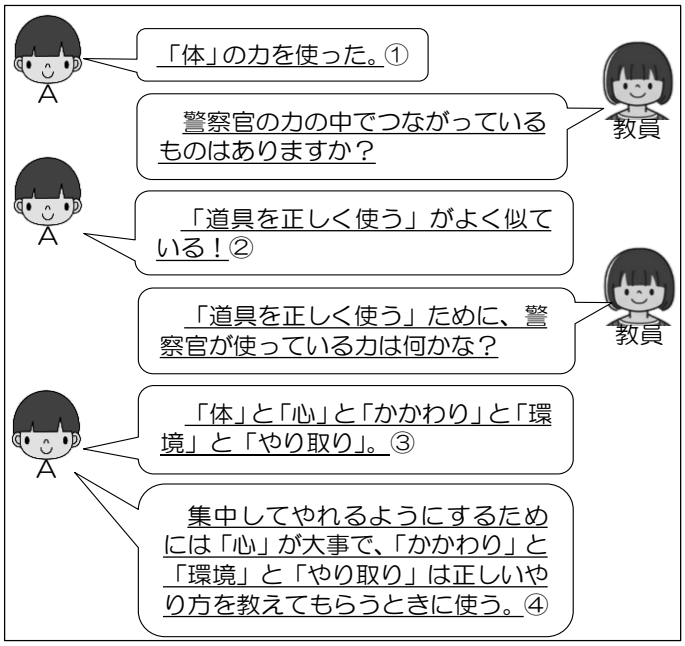
６区分 27 項目について再度共有した。ＡもＢも、「もう習ったからわかる」と内容を理解しており、「あいさつはいろいろな力を使うんだよ」「寝るは『健康』だったね」といった発言が聞かれた。また、Ａは「誰かと何かを一緒にするときは、『かかわり』と『やり取り』の力を使うことが多い気がする」と第１次授業実践を経て気付いたことを発表する姿もみられた。

②　てだて２　「自分の力と将来の夢を結びつける活動」

自分の力が、将来の夢とつながっていることを意識させるため、第１次授業実践のて

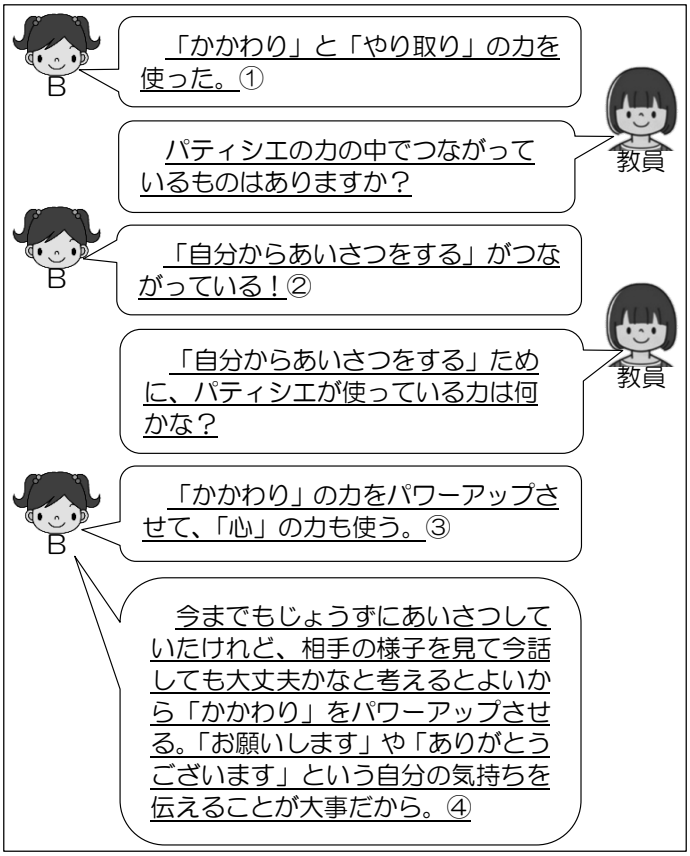
だて３であがった行動を振り返り、その中で使った力と将来なりたい職業に就いている人が使っている力を比較させた。

Ａは、「図画工作科の時間に金づちを正しく使った」という行動を取り上げた際（資料７）、「『体』の力を使った」（下線部①）と話した。警察官として仕事をする上で「道具を正しく使う」とつながっていることに気付き（下線部②）、そのために「体」だけでなく、「心」「かかわり」「環境」「やり取り」の力も必要であると発言した（下線部③）。その理由について、「集中してやれるようにするためには『心』が大事で、『かかわり』と『環境』と『やり取り』は正しいやり方を教えてもらうときに使う」（下線部④）と話した。また、「バスケで協力した」という行動を取り上げた際、発揮した力は「体」と「やり取り」と話した。警察官として仕事をする上で「協力する」ことが必要になってくることから、「心」と「かかわり」の力も必要であることに気付くことができた。その理由について、「自分がどんな気持ちかなと考えたり、相手の気持ちを考えて試合をしたり、『～やるね』と言ったりするから」と答えた。自分の力と将来の夢を結びつけて考え、「協力する」ためには相手の気持ちも大切だということに気付くことができた。



【資料７】　将来の夢と自分の力を結びつけて考えるＡの様子

Ｂは、「交流であいさつした」という行動を取り上げた際（資料８）、「『かかわり』と『やり取り』の力を使った」（下線部①）と話した。パティシエの仕事をする上で「自分からあいさつする」ことにつながっていることに気付き（下線部②）、「かかわり」の力を強化し、「心」の力も新たに必要であると発言した（下線部③）。その理由について、「今までもじょうずにあいさつしていたけれど、相手の様子を見て今話しても大丈夫か



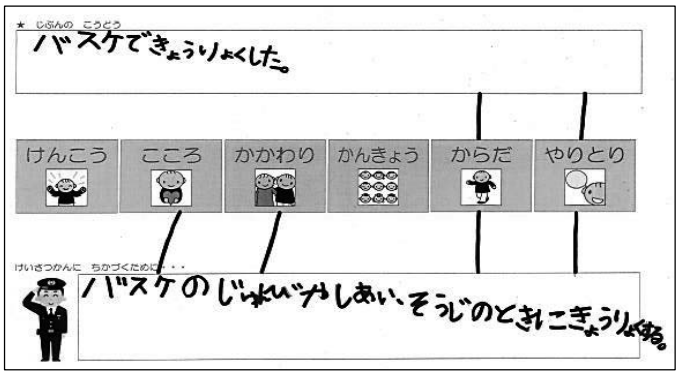
【資料８】　将来の夢と自分の力を結びつけて考えるＢの様子

なと考えるとよいから『かかわり』をパワーアップさせる」「『お願いします』や『ありがとうございます』という自分の気持ちを伝えることが大事だから」(下線部④)と話した。また、「バスケで作戦を立てるときに、友だちの話を聞いたり、自分のアイディアを話したりした」という行動を取り上げた際、発揮した力は「かかわり」「環境」「やり取り」と話した。パティシエとして仕事をする上で「相手のことを考える」ことが必要になってくることから、「かかわり」と「やり取り」の力を強化する必要があることに気付くことができた。その理由について、「友だちがどういう気持ちか考えることをもっとできるようになりたいし、作戦を話し合うときには『やり取り』がもっとじょうずにできると役に立つから」と話した。

③　てだて３　「自分の力を日常の具体的な行動と結びつける活動」

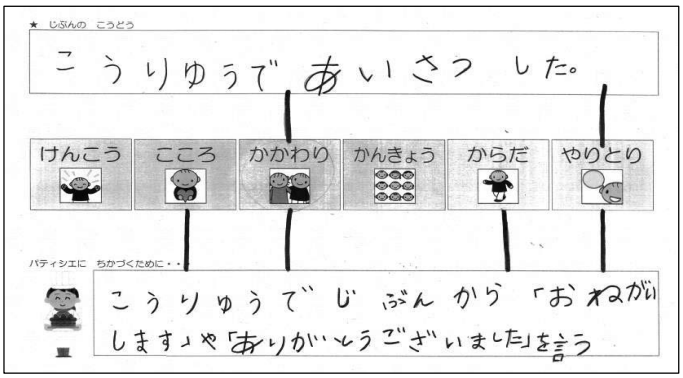
てだて２で気付いた自分の力と将来の夢とのつながりをもとに、将来の夢に近づくためにできる行動を考えさせた。

Ａは、てだて２で「バスケで協力した」という行動をもとに、警察官になったときに「協力する」ことができるように、「体」と「やり取り」の力に「心」と「かかわり」の力を加えて相手の気持ちも考えることで、友だちと協力しやすくなり、さまざまな場面で協力することができると考えた。そして、「バスケの準備や試合、掃除（片付け）のときに協力する」と夢に近づくための行動を考えることができた（資料９）。



【資料９】　Ａが考えた夢に近づくための方法

Ｂは、「交流であいさつした」という行動をもとに、パティシエになったときに「自分からあいさつをする」ためには「かかわり」を強化し、「心」と「体」を追加することで、相手の様子を見て、お辞儀をしながら自分の気持ちを伝えることができると考え、「交流で『お願いします』や『ありがとうございました』を自分から言う」と夢に近づくための行動を考えることができた（資料 10)。



【資料 10】　Ｂが考えた夢に近づくための方法

ＡもＢも上記の行動以外にも夢に近づくための方法を考えることができ、実際に実行しようと意欲をみせた。

その後、毎日帰りの会で、振り返りをした。Ａは、どの目標も達成しようと意識する姿がみられた。特に「協力する」場面では、以前は自分の気持ちを伝えることが多かったが、てだて２で協力するためには相手の気持ちを考えることが大切であると気づいたことをもとに、「心」や「かかわり」の力が必要であるということを意識し、相手は何をしたいか尋ねたり、相手に許可をもらってから行動したりするなど変化がみられた。教

員が称賛すると、「警察官になって犯人を捕まえるときには『協力する』が大事だから」「これだったら警察官で役に立つかも」と将来の夢を意識した発言も多く聞かれた。

Ｂは、特に「自分からあいさつをする」を意識して行動していた。元々決まった場面であいさつをすることができていたが、相手の様子を見て、自分の気持ちを伝えることができると考え、強化した「かかわり」や新たに加えた「心」や「体」の力を使い、教室に入る際にお辞儀をしたり、相手の目を見てあいさつをしたりするなど行動に変化がみられた。交流学級の担任から返事をもらったり、「あいさつがじょうずにできるね」と称賛されたりするとうれしそうな表情を見せ、「次も『かかわり』をパワーアップさせて廊下で会った人にもあいさつをしたい」といった前向きな発言が聞かれた。

このように、ＡもＢも将来の夢に近づくために自分ができる行動を考え、自分の力を発揮することができた。友だちの様子や教員からの称賛によって、夢に近づくための方法を考えて実行することができたと実感し、将来の夢を意識して次への行動に意欲を高める姿がみられた。しかし、自分の行動を振り返ることはできていたが、友だちの行動に気付いて認め合い、称賛し合う姿はみられなかった。

(3) 成果と課題（○成果　●課題）

○　自分がとった行動をもとに、自分の力と将来なりたい職業に就いている人がもっている力を結びつけ、自分の力と将来の夢がつながっていることに気付くことができた。

○　夢に近づくための方法やそのために必要な力を考えて実行し、自分の力を発揮することができた。

●　夢に近づくために考えた行動ができた際に、教員からの称賛はあったが、周りから認められる機会は少なかったため、できたことを報告し合い、認め合う機会をもつことが必要である。

５　交流学級での実践

Ａは交流学級での体育科や図画工作科の授業においても、交流学級の友だちと「協力する」ことを意識した行動がみられるようになった。授業の準備や片付けだけでなく、グループ活動でも交流学級の友だちと役割分担をしたり、試合に勝つための作戦を立てたりするなど、少しずつ交流学級の友だちと「協力する」場面を増やすことができ、「だんだん警察官に近づいているかも」と自身の成長を実感している様子だった。

Ｂは「廊下で会った人にもあいさつをする」という目標を達成するため、交流学級の友だちに自分からあいさつをすることが増えた。交流学級の友だちが返事してくれたことを励みに、他学年の友だちにも自分からあいさつをすることができるようになり、Ａ同様、今回の実践を活用する場面を増やすことができた。

６　研究のまとめ

ＡとＢは自分の力を理解した上で、将来の夢や日常の具体的な行動に結びつけて考えさせたことで自分の力と将来の夢がつながっていることに気付くことができた。そして、将来の夢に近づくために必要な具体的な行動を考え、自分の力を発揮する姿につながった。これらを積み重ねたことで、「将来○○になるために～したい」といった将来の夢に希望をもつ発言が多く聞かれるようになった。今後も将来の夢に近づくための方法を考え、実行する経験を積むとともに、できたことを周りから認められる機会を設けて意欲を高めることができるようにして、夢にむかって発揮できる力をのばしていきたい。